
一人じゃないから・・・

神田一明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人じゃないから・・・

【Zコード】

Z6239H

【作者名】

神田一明

【あらすじ】

転校してきた女の子ちょっととしたきつかけで仲良くなるが私大に
かの字の中にあるものが浮き彫りになつてくる。そんな時の俺の行
動は・・・

「プロローグ」

「起立。」

教室に担任の松島先生の声がかかる。

「礼、着席。」

再び声がかかり、生徒達は思い思いに席に着く。

「今日からみんなも一年生だ、今年は俺がこのクラスの担任だから、よろしくな。」

俺は現在高校一年生、去年は特に何もなく過ぎたが、今年は何か良いことがあるといいのだが。

「さて、転校生が居るのはみんな知っているな？紹介するわ。」

先生は言いながら教室のドアを開けた。

「さ、入って。」

廊下から一人の生徒が入ってきた。

教室内がざわめきたつ。

主に男子の声で。

少し細めの体つき、肩まで伸びたセミロングの黒髪、背は女子にしては低めの方だろう。

かわいい！

「自分で自己紹介できるな？」

「・・・高橋 優衣です。よろしくお願いします。」

「さてと、高橋の席だが・・・空いてないな。」

いや、来ることわかつてゐるんだし用意しこうよ。

「おかしいな、ちゃんと用意してあるはずなのに、まあいや、大広。

「はい？」

俺？

まさか取つてこいつて？

「ちょっと行つて机取つてきてくれないか？」

「ああ、やつぱり。

「いいつすけど、何処に行けば良いんですか？」

「ああ、一階の倉庫にあるはずだから。」

「解りました。」

まあ、特に断る理由もないしいいが。

「高橋は大広が帰つてくるまで大広の席に座つていってくれ。彼女はコクリとうなずいた。

「持つてきました。」

「おう、『苦労さん、そのままお前の席の隣に席をつくつてやれ。』

「はあーい。」

「あの・・・有り難うござります。」

小さな声だな、緊張してゐるのかな。

こうして、俺の新しい高校生活が始まったのだ。

第一話

「二人の間・・・」

キーンゴーンカーンゴーン・・・

「ヒロ君。」

後から声をかけてきたのはこれぞ幼なじみと言わんばかりの腐れ縁の綾夢 佳奈。

長く腰まで伸ばしたストレートロングが似合つ中背のかわいい系の女子。

「なんだ？」

「今日はもう帰るんでしょう？」

「ああ。」

「だったら、帰りに何処かに寄つていこうよ。」

「いいけど、一人でか？」

「そんなわけ無いでしょ、マサ君も誘つわよ。」

「俺より先に誘うのが普通じゃないのか？」

「え？いや、ヒロ君の方が教室近いから。」

マサ君とは去年俺と同じクラスで気が付いたら親友ぐらいいの仲になつていた紫竜 将喜、世間一体で言う「いい男」と言つヤツである。そんなあいつも俺の手引きの中、今では佳奈と付き合つてるのであつたりもする。

「まあいいや、とりあえず誘つていい。」

「うん、じゃあ待つってね。」

教室を出て行く佳奈を見送り、俺も荷物を取る。

とりあえず外で待つていよう。

「ドン！」

教室を出た俺はいきなり誰かとぶつかってしまった。

「きや！」

相手はその拍子にしりもちをついて、廊下に腰をついてしまった。

「わ！大丈夫？ごめんね。」

相手は今日転校してきた高橋 優衣だった。

「高橋さん、大丈夫？」

「・・・あ、大丈夫です。すいません。」

彼女は俺の出した手を取つて立ち上がりそう言つた。

「それでは失礼します。」

彼女はぺこりと頭を下げて下駄箱の方に歩いていった。

「じゃあね、また明日。」

俺は軽く手を振つた。

あ、佳奈と将喜が待ってるな、急いで。

2年生の生活も今のところ特に変わった様子もなく平穀と過ぎていく。

「ん? なんだこれ? 財布かな? 」

「… 女物みたいだけど、誰のだろう? 」

んー、外部に個人を特定できるものなし。

あたりに人目なし。

女の子だろうし、直接届けて高感度アップw

「ちょっと失礼しますよ。」

財布を開けて中を見た。

「おー! 定期が入ってる… タカハシユイ… 」

高橋さんか。

「そりゃあ教室で探し物してたっぽいな。」

教室を覗くと高橋さんはまだ何かを探していた。

「高橋さん、探してるものってこれ? 」

「あー! 」

彼女は俺の持っているモノに気が付いて立ち上がった。

「あ、これやっぱ高橋さんのなんだ。廊下に落ちてたよ。」

「… あの、有り難うござります。」

硬いな。

そういうえばクラスでもまだあんまり打ち解けてない感じだったな。

「お礼を言ってくれるのは嬉しいんだけど、せつかく同じクラスになつたんだら、敬語じゃなくてもいいと想つよ。」

「? 」

彼女はわからないらしく、首を傾げている。

「だから、『有り難うございます』じゃなくて、『有り難う』で良いよ、そっちの方が俺も話しやすい。」

「… でも… 」

「良いって。クラスメイトだろ?」

「……その……ありがと……」

彼女は小さくそう言つた。

「じゃあ、一緒に帰る?」

「え……?」

やつぱり急過ぎだよな。

「でも……」

「良いから良いから、ね。」

多少強引でもせつかくだから仲良くなりたいよね。

彼女は少し悩んだが小さく頷いた。

「ねえ、高橋さんって、いつも来る前に何処に住んでたの?」

「……青森……」

「青森、りんごおこし……よね?」

「……うん……」

「そつか、いつも来るともう暖かいでしょ? あつあつまだ雪が降つている頃だよね?」

「この時期、雪は降つてないの、ここよりは寒いけど……」

「ふーーん、そなんだ。」

まあはじめはこんな会話だらうな。

次の日

俺はとても早くに目が覚めて、いつもより20分は早く学校に来た。あ、もう高橋さんがいる。

まだ時間も早く他の生徒の姿は見えなかつた。

「おはよー、早いね。」

声をかけた俺に気が付いた彼女は、

「あ……えっと、おはよう。」

「いつもこんなに早いの?」

「へへ。彼女は読んでいた本を置いてこいつを向いていた。」

「大広君も早いね。」

「今日はたまたまだよ、かなり早めに起きちゃったから、家にいてもしようがないから学校に来たんだ。いつもはチャイムギリギリだけね。」

「そんなんだ、遅刻したこと無いの?」

「そんなの、しようちゅうだよ。」

「クス・・・」

彼女は今確かに笑った。

彼女の笑顔は初めてみた気がした。

早起きするのも良いな。

帰り道。

俺は駅前で高橋さんを見かけた。

俺は近寄って声をかけた。

「高橋さん。」

彼女は俺の声に気が付いて振り向いた。

そして、ペコリとお辞儀を返してき。

「今帰り?」

彼女はコクリとうなずいた。

「一緒に帰らない?」

彼女はまたコクリとうなずいた。

基本口数少ないよな。

俺達は一緒に電車に乗った。

「・・・ねえ、神田君つていつも一人で帰ってるの?」

珍しく彼女から話しかけてきた。

「うん、まあ、大概はね。」

「・・・寂しくない?」

「もう慣れちゃったかな。学校に行けばみんなと会えるから行き帰

りの寂しさなんて無くなっちゃたかな。」「

「…・・良いな・・・」

「え?」

「良いな、そんな風に考えられるなんて。」「どうゆうここと?」

「私ね、青森ではいつも友達と帰っていたの、でもこいつでは友達いないから少し寂しくて・・・」

彼女は少しうつむいて言った。

これはチャンスだ!

「・・・じゃあ、今日からは俺が友達だ!! 友達もこれから少しずつ作つていけば良いんだよ。帰り道も毎日一緒にだ。」

「・・・でも・・・迷惑じゃ・・・」

「迷惑だなんて、そんなこと無いよ。俺もいつも一人、君もいつも一人、丁度いいじゃないか。」

「・・・じゃあ・・・その・・・お願ひしようかな・・・」

彼女は少し恥ずかしそうに答えた。

「良し、じゃあ、今日はどうかに遊びに行こう!!」

「え!!」

彼女はびっくりして聞き返した。

「うん、せかつく友達になつたんだ、その記念とゆづか、歓迎会みたいなもんだよ。」

彼女は少し困つた顔をしていた。

「時間ないの?」

「・・・時間は大丈夫だけど・・・でも・・・

「でも?」

「・・・うんなんでもない、行きましょう。」「

彼女は慌てて首を振つた。

「うん、じゃあ、何処に行こう?」

「・・・あの、私・・・ゲームセンターに行きたい・・・」

彼女の口からはかなり意外な場所が告げられた。

「私、あっけで仲良くしてた友達が良く連れていってくれたの、そしたら私もよく行くようになったから、それで……」

「……うん、わかった、じゃあ、行こう。」

彼女は「クリとうなずいた。

駅を出て、少し歩いた所にあるゲーセンに入った。

ゲーセンも久しぶりだな。

俺たちは一時間ほど遊んで、店を出た。

「じゃあ、また明日ね。」

彼女は「クリとうなずいて列車を降りた。

それからしばらくは俺と高橋さんは毎日のように一緒に帰っていた。

高橋さんは転入してきた頃よりはかなり明るくなつた。

俺は高橋さんを少しずつだけどわかつってきたような気がした。

第二話

「確かな気持ち・・・」

ある日。

「ねえ、ヒロ君。」

校門で佳奈に声をかけられた。

「どうした?」「

「知ってる?」「

「何がだ?」「

「カズ君と高橋さんが付き合つてるって噂。」

佳奈の口からはとんでもない言葉が放たれた。

「はー?」「

「……ホントに知らないの?」「

「全然。」

いや、マジで知らんぞ？

「・・・とりあえず、うちのクラスはみんな知ってるよ。」

「・・・そうなの？大変だな。」

「とりあえず、気を付けなさいよ。」

「あ、そうするよ。」

でも、何に気をつければいいんだ？

「高橋さん、帰るー。」

俺は、いつものように、夕焼けに照らされた教室にいる高橋さんを誘つた。

「・・・大広君・・・」

「どうしたの？早く行こ。」

「・・・大広君、噂は知ってるの？」

彼女はうつむきながらそう言った。

「噂つて？」

俺はなぜかとぼけていた。

「・・・神田君、あなたは私のことどう思ひつへ。」

彼女はいきなり変な質問をしてきた。

「どうつて？」

「・・・その、好きとか、嫌いとか・・・」

「好きだよ？」

「・・・それつて、友達として？」

「うん、そうだけど、それがどうかしたの？」

「・・・ごめんなさい、私もうあなたと帰れない・・・」

彼女はそう言うと鞄を手にとつて、教室を出て行ってしまった。

・・・追いかけられなかつた。

次の日。

「高橋さんかえ・・・」

彼女は俺を無視して帰ってしまった。

・・・俺が何をした？

俺はそれからも高橋さんを誘っているのだが、完全に無視されている。

最近は、俺の帰り道はずつと一人だった。

そんな帰り道の中、俺は妙に寂しい気持ちがわき上がりってきた。前はこんなコトはなかつた、前一人で帰っているときも、ずっと無かつた気持ちだった。

「ヒロ、お前、恋したな。」

「は！？」

俺は自分の気持ちが解らずにある日将喜に相談した。その将喜の口から予想もしなかった言葉が発せられた。

「だから、それは立派な『恋』だよ。」

「・・・ そうなの？」

「そうなの。」

「しようがないよ、ヒロ君はそんな経験がないもん。」

横から佳奈が口を挟む。

その日の放課後。

「たかは・・・」

俺は高橋さんに声をかけようとすると、高橋さんはすたすたと教室を出ていった。

「・・・。」

俺はただどうしようもなく一人で立っていた。

そのあと俺はずつと教室で立ち尽くしていた。

「「」のままじややつぱり嫌だ。」

そして一夜あけて土曜日・・・

俺は毎を回つてから家を出て電車に揺られていた。

「 いの辺だけど・・・」

俺はメモに殴り書きにして住所を見直した。
今高橋さんの家を目指して道を歩いている。

「 いこだ。」

一つの家の前で足を止める。

表札は『高橋』なつている。

ピンポン～～ン。

俺は迷うことなくインターフォンを鳴らした。

しばらくするとドアが開いて中から一人の女性の顔が出てきた。

「 どなた? 」

「 あ、こんにちは、僕、高橋さんのクラスメイトの大広と聞こます。

高橋さんは在宅でしょつか? 」

俺は丁寧に言った。

「 ・・・ ああ、あなたが大広君ね、いつも娘から聞いてるわ、そ、
入つて。」

どうやら、顔を出した女性は高橋さんのお母さんのようであった。

俺はとりあえずすすめられるまま居間に通された。

うわあ、なんか緊張する、どうすりやいいんだ?

しばらくして、高橋さんが入ってきた。

「 ・・・ こんにちは。」

「 優衣、お母さん出掛けてくるからね。」

「 あーーちょっと、お母さん。」

彼女が何か言おうとしたが、彼女のお母さんはすでに玄関を出て行

つてしまつた。

「 ・・・ 高橋さん。」

「 ・・・ どうしたの? こきなり。」

「……いや、最近高橋さんと話すことが出来なかつたから、高橋さんがなぜ俺を避けるのが気になつて。」

俺の言葉に彼女はただ下を向いてるだけだつた。

しばらくの沈黙が流れた。

「……高橋さん、君が俺を避けるのは、噂が原因なの？」

彼女はコクリと頷いた。

「迷惑なの？俺じゃ、嫌なの？」

俺はてんで訳の分からぬことを聞いた。

彼女は首を横に振つた。

「じゃあ、なんで？」

「……その、恥ずかしかつたから……」

「……そつか、恥ずかしかつたんだ。」

俺は少し安心したように言つた。

「ねえ、あくまで噂なんだしさ、別に本当に付き合つてゐわけじやないんだから、話したりとかしてもイイじゃん、だつて俺達、友達だろ？」

言つて恥ずかしい。

「え……」

彼女は少し顔を上げるがすぐに下を向いた。

「言いたい奴には言わせておけば良いんだよ。また一緒にゲーセン行こうよ。」

「……大広君……」

彼女は小さく笑つた。

よし、これでまた二人で帰れるかな。

「じゃあ、また学校で。」

「うん」

「あら、神田君、もう帰るの？」

ちょうど帰りうとしたところで、高橋さんのお母さんが帰つてきた。
えらくタイミング悪いお母さんだな。

「あ、どうも、お邪魔しました。」

「いいえ、また来てくださいね。」この子に向かってからしばらく元気なかつたんだけど、あなたのことを話したと思ったら、急に元気になつたから。これからも仲良くしてあげてくださいね。」

「お母さん！」

高橋さんに制されて、お母さんクスリと笑つた。

俺はおじぎを返して帰つていつた。

次の日。

「高橋さん、帰るー。」

「うん。」

彼女は笑顔で頷いた。

俺はこの日彼女への気持ちを確信した。

それから一週間彼女は学校に出てこなかつた。

「やつぱり行かないと駄目だな。」

先生に確認しても「家庭の事情だそうだ」と言われるだけであつた。

それから一週間彼女は学校に出てこなかつた。
「やつぱり行かないと駄目だな。」
俺はまた高橋さんの家に向かつて電車に乗つた。

ピンポーーン

しばらくするとドアから高橋さん本人の顔が出てきた。

「あ・・・

「高橋さん！？」

彼女は俺の顔を見るとドアを閉めてしまった。

「・・・

いやいやいや

ピンポ～ン

俺はすぐにインターフォンを押した。

反応は無かった。

ピンポ～ン・ピンポ～ン・ピンポ～ン
俺はただひたすらインターフォンを鳴らした。

5分ほどしただろうか。

ドアを開けて高橋さんが出てきた。

「やっと出てきた。高橋さん学校に出てこなかつたからどうしたのかと思つて。」

「・・・少し時間ある?」

「時間?全然あるよ。」

「じゃあ、少し出掛けましょうか。」

「うん。」

俺らは近くのファーストフードの店に入った。

「大広君・・・」

「何?」

先に口を開いたのは高橋さんだった。

「私ね、この間、青森の友達に電話したの。それでね、やつぱり好きだったのかな?何か妙に安心しちゃつて、その勢いで・・・その・

・・告白したの・・・」

「!」

・・・告白・・・俺がしようと思つたのに・・・高橋さん好きな人居たんだ・・・

「・・・あ、それでどうしたの?」

「・・・うん、それでね、彼・・・今付き合つてる人がいるって・・

・それが、私の親友だったの。」

「・・・」

俺は何も言わずに話を聞いていた。

「それでね、私すぐにその子に電話して聞いたの。そしたら彼女・・・
・・・ずっと私も好きだったの、あなたが引っ越してくれて助かつた
わ有り難う。」って言うのよ。それで、私、何だか友達が信じられ
なくなつて、人間不信になつちゃつたのかな?だから、学校も行け
なかつた、大広君に会うのが怖かつたの。」

そつか、それで・・・

「・・・ねえ、私どうしたらいいの?もう、誰も信じられない気が
する。」

「・・・高橋さん、それは嘘だ。」

今度は俺が話し始めた。

俺がここで何か言わないと彼女は一生一人になつてしまふかもしれ
ない。

「高橋さんは少なくとも俺のことは信用してんじやないのかな?
そうじやなかつたらこんな話してくれないよね。」

「・・・でも、私・私・・・」

「高橋さん!・!」

俺は思わず大声を出していた。

周りにいたほか子供たちがびっくりしていた。

「俺のことは信じてよ。」

「・・・大広君・・・」

「俺は、君のそんな姿や言葉のために來たんじやない、君が友達を
信じられなくなつたとしても、俺は君のコトを裏切つたりはしない、
それだけはわかっていて欲しい。」

「だめだ、これ以上は恥ずかしすぎてこの場に居れない。」

俺は先に帰つた。

それから一日が経つた。

「おはよう、ヒロ君。」

「おはよう、佳奈、おはよう。」

俺はいつものように学校に來た、そして教室に入ると、俺のとなり

の席には高橋さんが居た。

「あーー！おはよー、高橋さん。」

「・・・お、おはよー。」

高橋さんは小さくそつそつと話した。

俺はその言葉だけで、何かとつても嬉しかった。

第三話

「伝えた気持ちは・・・」

高橋さんが引っ越してきて4ヶ月が経った。
学校も夏休みに入り俺たちは学校に行っていたように毎日会うなんてことはしていないものの、なんだかんだでよく一緒に出かけている。

今日も一緒にプールへ行き、その後花火大会へ出かけることになっていた。

いやあ、正直女の子と二人でプールとか初めてだし緊張するなあ

「お・おはよー。」

「あ、おはよう。」

高橋さんも緊張しているようで、いつもに増して物静かだ。

「プールプール、早速泳ごうーー！」

「うん」

着替えて、集まるなり俺は真っ先に水の中へと入っていった。
正直無理、かわいすぎて横に並んでるとかできない。
ということで、まずは水の中へ逃げることにした。

「次はあれにしよう！」

「まつて、ちよつと休憩・・・」

とりあえず、恥ずかしいので次々とスライダーやら流水プールやらを渡り歩いてきたけど、さすがにペースが速かつたようだ。

「あ、ごめんね、じゃあ売店に行こうか。」

「うそ」

若干肩で息をしている高橋さんは見てよつやく足を止めた。

「焼きソバ・たこ焼き・ポテト・カキ氷

「そんなに食べるの?」

「え、多いかな?」

「私はそこまではいらないかな。」

まあ、それもそつか、でも食べよつ。

「あの・・・」

「うん?」

「今日は、誘つてくれてありがとう。」

「う・うん、俺も行きたかったし。」

いかん、そんなこと言つなんてかわいすぎでどうしたらいいかわからん!—!

高橋さんは少し顔を赤らめているけど、多分俺の顔も赤いんだろうな。

「あれ? ヒロ君?」

この聞きなれた声はまさか・・・

「よつ、奇遇だな。」

確認するまでもなく幼馴染の綾夢 佳奈と親友の紫竜 将喜だった。

「あ、おう、お前たちも来てたんだ。」

「ああ、一人か?」

「ああ、一応。」

しまつたな、もう少し遠出すればよかつたか。

「私、ちょっとごめんね。」

「

高橋さんはたまらず席を立ち上がつていつてしまつた。

「お前らいつの間にそういう関係になつたんだよ。」

「いや、別にそういうわけじゃ……」

「ヒロ君やるじゃん。」

まったく、いつこう風になるから知り合いで会つのはいやだつたんだ。

「あの、ちょっとやめてください。」

「いいじゃん、あつちで俺たちと遊ぼうよ。」

「あの、いや……です……」

「ちょっとあれ、彼女じゃないの？」

「え？」

佳奈の声に目をやると高橋さんが男一人に囲まれていた。

「何してんだあいつら……」

慌てて席を立ち高橋さんの下へと走り出した。

「ちょっと、何してるんですか！？」

「あ？ 何だよテメー！」

「大広君」

「手を離してください。」

そう言いながら駆け寄つた瞬間

ガツン

目の前の景色が回転し、頭に強い音が響いた。

そして目の前が真つ暗になつた。

「・・・・いつ・・・・」

ふと目を覚ますと見知らぬ天井が目の前にあつた。

「大広君！」

「ヒロ君、大丈夫？」

声のほうへ目を向けると泣きそつた顔の高橋さんと佳奈と将喜がいた。

「俺はどうして？」

「高橋さんを助けようとして走ったのはいいけど、足滑らせて頭打つたのよ。」

「ああ、そうか、そういうことか。」

「高橋さん、大丈夫？」

「わ・私は大丈夫、でも大広君が。」

「ああ、うん、頭は痛いけど、高橋さんが無事ならそれでいいや。頭はズキズキと痛むけど、精一杯の笑顔を見せて言つ。」

「大広君、ありがとう。」

佳奈達はそつと部屋から出て行つた。

「花火大会楽しみだね。」

「でもこんななんじや行けない。」

「大丈夫大丈夫、すぐに治るよ。」

「でも・・・」

「ああ、でもかつこ悪いところ見せちゃつたな。」

とりあえず話題変えないことにはほんとに泣きそうだ。」

「ううん、そんなことない、かつこよかつたよ。」

「いやあ、結局すつころんだけだつたみたいだし。」

「でも、すぐに来てくれた、私はすごいうれしかつた、ありがとう。」

「かなり照れながらそういう高橋さんを見てると、どうしようもないくらい照れくさくなつてくる。見なくともわかる、顔は真っ赤になつてるだろ?。」

「この時間になるとだいぶ涼しくなるね。」

その後、とりあえずそれぞれ家に帰り、もう一度集合しなおした。なんとうれしい話だろうか、高橋さんは浴衣で戻ってきた。

「その、『ごめんね俺のせいでいい場所取れなくなつて。』

「いいの、人ごみ苦手だし。」

「そつか・・・えつと・・・かわいいね浴衣。」

「・・・あ・ありがとう。」

赤い生地に白い花の浴衣

「それ何の花?」

「りんごの花」

「へえーりんごに花あるんだ。」

「うん、私好きなの。」

「うん、やっぱりかわいいね。」

そんなことを言いながらいい感じに落ち着ける場所を見つけて腰を落ち着けた。

程なくして花火大会は始まり、何発もの花火が夜空に打ち上げられた。

「きれいだねー。」

「うん、とっても。」

高橋さんのほうがきれいだとか、言えない。
言つたらこの場に居られないよ。

だんだんと打ちあがる花火が激しくなつてきた。

そろそろクライマックスだろうか。

今日の最大の目的が俺にはあつた。
高橋さんに自分の気持ちを伝えるために今日のイベントを用意したのだ。

今・・・今ならいける・・・

ああ、でもプールでこけたし・・・

・・・どうしよう・・・

「あのね、大広君。」

「あ、なに?」

「引っ越してきてから、友達も居ない私にはじめに仲良くしてくれたのは大広君だった。」

突然深刻な顔をしながら高橋さんは話し始めた。

「私がふさきこんでるときも真っ先に心配してくれて、家まで来て
くれて……」

「うん」

「今日も助けてくれて、本当にうれしかったの。」

「……まあ、かつて悪いところ見られたわけで……」

「私……大広君のことが好きよ、これからもずっと……」

「え……ほんとに……」

「いやいやいや、ていうか、先に言われたよ。

「もー、ホンとかつて悪いな俺。」

「え？」

「俺も高橋さんのこと好きだよ、今日はそれを言おうと思つてたんだ。」

「え……ほんとに？」

「うん、でも先に言われちゃつて、ほんとにかつて悪いよ。」

「ああほんとにもう！」

「こんなかつて悪い俺でもよかつたら、その……付き合つてくれないかな？」

「……うん、ありがとう。」

「俺のほうこそありがと。」

ちょうど花火も終わつたようで、一気にあたりは静かになつた。

こうして俺たちは本当にカップルになつたわけで。

佳奈達みたいにバカップルにはなれるかどうかはわからないけど、二人でこれからも楽しくしていこうと思つ。

そして、8月が終わり、新学期。

「おはよ。」

「おはよ。」

俺は顔いっぱいの笑顔の高橋……いや、桂美さんと朝の挨拶を交

わした。

彼女の引っ越し思案な感じはあまり治つてないが、信頼できる友達も見つけたようだつた。

彼女はもう、一人じゃないから・・・一人じゃないから大丈夫だ、だつて俺がいるんだから。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6239h/>

一人じゃないから・・・

2011年10月5日08時28分発行